

☒ 書室ボランティアとして、2014年から活動している吉川陽子さん。当時、広報しらぬかに掲載していた「図書室ボランティア募集」の案内を見て、公民館図書室へと足を運んだ。

「図書室ボランティアといっても何をするのか分からなくて、どんなことをするのだろうと公民館図書室へ行ってみました。最初は本の貸し出しカードを入れるポケットを作ったり、新聞のスクラップをしたりしていましたが、今では除籍といって古い本や資料を台帳から除く仕事や本にビニールをか

ける仕事などをしています」

ここまで長くボランティア活動を続けているのはなぜだろうか。

「以前、書庫に山のように積んであった本をきれいに並べたとき、ものすごい達成感というか、気持ち良かったんですね。それで私は整然と物を並べるのが好きなんだって分かったんです。それから自分の“やりたい”という気持ちだけでボランティア活動をしているのですが、そのたびに職員の方が『ありがとう』って言ってくれて。別にお礼を言ってほしいとか、誰かの役に立ちたいとか思っ

ているわけではないけれど『ありがとう』って言われると、すごくうれしいんですね、だから“明日もまた来よう”って思う。今ではここが私の居場所だって勝手に思っています(笑)」

将来、自分はどんな仕事をしたいのか、何をしたいのかが分からないという学生は大勢いる。

「私だって教員になりたいと思っていただけじゃないですし、それは本を読んだり、何かをしたから見つかるというものでもない。いろんなことをやってみるしかないんだと思います。そしていつか、自分に合ったモノが見つければ、それでいいんじゃないでしょうか」

吉川さんは、図書室ボランティアの活動で何かが変わったのだろうか。「ボランティア活動で交流関係が広がりました。買い物をしているときに会ったら『元気?』と声をかけてくださったり、そういう人の繋がりができたのはすごいと思います。図書室は本を借りるだけの場所じゃなくて、もっと気軽に来て、おしゃべりをする場所であってもいいんじゃないかって思うんです。そうやって話をして仲良くなると、その人が読んでいる本を読んでみようと思う。そうやって本を読んだら、その本の著者の違う作品を読んでみたくなったり、読んでいる本の中に別の本の話が出てきたら、その本も読んでみたくなったりと、そうやって本のジャンルが広がっていくと自分の世界も広がっていく。私はたまにしか読書をしない人だったんですけど、今では古事記がマイブームなんです。今度は日本書紀を読もうかな(笑)」

吉川陽子

よしかわ ようこ

1954年8月18日生まれ。白滝村(現遠軽町)出身。北海道教育大学旭川校卒業。北海道旭川養護学校や白糠養護学校で教員を務めていた。趣味はバードウォッチングとウォーキング。夫との2人暮らし。



「ボランティア活動で 交流関係が広がりました」



「妊婦さんや高齢者など、本を借りに来ることができない人のために本を届けるボランティアがあってもいいですね」という吉川さん。